

は公表を差控へる。兎に角彼等が尙ほ存在して居る事だけは儼然たる事實である。予は決して動かし難き全確信の力を以て諸君の前に斷言する——彼等の生命は存續して居る、彼等は尙ほ地上の出來事に關心して居る、彼等は吾等を助力して居る、彼等は吾等よりも遙かに豊かに事物を知つて居る、彼等は時々吾等と交通する事が出來ると。こは眞に大膽なる提言である——眞に驚く可き結論である。此結論が如何に偉大なるものであるかは、諸君の何人も、否予自身すらも、本當には呑込めぬ。

「一人にして萬事を研究することは不可能である乍併一つの研究に三十年乃至四十年の歲月を捧げた人ならば、其事に關して知り得たる研究の結果を、世に公表する資格があると思ふ。予は今多年の研究の結果を諸君の前に陳述するのである。諸君は固よ

回教徒の反基督教的的精神

基督教國の間に行はれつゝある今回の大戦は、回教徒に向つて基督教文明を批難すべき幾多の好口實を與へて居る。夫等の批難のうちで吾等が下に摘録せんとする一篇は、教祖の後裔で阿富汗斯坦に生れ英佛獨に留學したアーメッド・アブダラーと云ふ回教徒の筆になつたものである。彼は歐米人が神の啓示を讀む明なき事、覺醒しつゝある亞細亞の囁きに耳を閉ぢ居る事を述べ、基督教徒、白色人種は自負裕高に心曹みて歴史の教訓、時代の休徴を誤り讀んで居る事を批難し、次の如く云うて居る。

「汝等西洋人は過去及び現在の歴史的事實を、公平に又正直に解釋する事を拒む程、自ら東洋人に比して優秀であると思ひ高ぶつて居る。そして汝等の子孫をして西洋人は東洋人に對して比較にならぬ程に優越であると云ふ事を信じさせる爲めに淺薄な虚偽な教育を施して居る。成程物質的進歩に於ては汝等は過去二三世紀の間世界の指導者であつた。そし

り證據を要求するであらう。その證據は既に心象研究會の幾多の報告に於て公表されて居るし、今後も續々公表されることであらう。諸君は容易に我々の結論に賛成はすまい。然り急ぐ必要は無い。然しながら此問題に關して深く研究した人々は、次第々々に死後の存續の疑ふ可からざるを確信するやうになつた。

「此事は我等をして我等をして一切の存在の裡に流るゝ統一を認めざるを得ざらしめる。予が人間は孤獨でないといふ、他の睿智的存在者によりて取巻れて居ると云ふのは此が爲めである。若し諸君にして一たび束縛を脱却すれば、又他の束縛を受けることとがない、諸君の前には永遠の向上あるのみである諸君は終には神にまで進んで行かねばならぬ。」

「道」第82号(1915.2)

て自らの成功に驚喜して、物質的進歩に於ける現在の覇權は將來に於ける汝等の優越を保證して居るもの、如く誤信して居る。さりながらこは一箇の夢想に過ぎぬ。

「歐羅巴及び印度を征服せる白色人種が他人種よりも優越であると云ふのは架空の想像に過ぎぬ。印度に於ける汝等の同族は其の征服した劣等民族の爲めに同化せられた。恰もノルマン人がサクソンアングロ人に同化せられ、アレキサンドリア・ゲリーキ人がエヂプト人に同化せられ、蒙古人が漢人に同化せられたやうに。

「吾等は何故に汝等の足元に俯伏せねばならぬか教師が生徒に物を學ばねばならぬのか。汝等に讀み書き且考へる事を教へたのは吾等である。汝等に宗教と理想とを與へたのは吾等である。吾等は汝等が決して爲し能はぬ多くの事を、汝等の爲にしてやつた。汝等を古の迷信と邪奉とより解放したのは吾等

である。汝等に科擧と文學の最初の炎を興へたのも吾等である。汝等の爲に物質的進歩を開拓したのも吾等である。若し吾等の助力なかりせば汝等は今尙ほ蒙昧の民であつたであらう。然るに今や汝等は其の本來の無知と殘忍とを此度の戦争に於て曝露して居る。他日吾等回教徒が全亞細亞及び亞弗利加を改宗せしめ了つた曉に、吾等は數十萬の亞細亞軍を率

獨逸宰相ベートマン・ホルウエヒ

獨逸宰相ベートマン・ホルウエヒは、複雑な時代に住む純一な人間である。さなきだに丈高き宰相が黒い外套を着て絹帽を戴いて、兩手を後に組みながら俯き勝ちに歩みを運び、時々立停りて忘れ物を想ひ出したやうに考へに沈む姿は、一國の政務の首班に坐する人と云ふよりは、貧しき大學教授の面影がある。

彼は歐大陸の大官に常に見るやうな横柄な態度を

る第二のタメルランを歐羅巴に送る事であらう。『吾等は利己的な欺謀に満ちたる邪惡なる基督教の下に、多年の間道德的侮辱と物質的迫害とを忍んで來た。さりながら吾等には若し回教が危急に迫つた曉には、起つて争ふべき偉大なる力を有つて居る若し汝等にして道理と正義との叫びに耳を閉ぢるならば、汝等は炎の劍に依る教訓を受けねばならぬ。』

微塵も有つて居らぬ。何人とも會ひ、何事でも心置きなく話す。その擧作には一種の朴實があり、その言話は重々しい。彼はよく書店の店頭に立ちて新刊の書籍をあさる。そして彼の手にするのは概ね哲學の書物である。彼は馬車をも自動車をも驅らぬ。彼は靜かに徒歩して役所へも宮殿へも行く。彼の食卓は極めて質素である、——彼は軽い麥酒とソーセイジとで満足して居る。そして流行後れの粗服で満足

して居る。

彼の勤勉、その執着力、その憂鬱な性格、その堅實な基督教の信仰は、ブランデルブルグ人の特長を最もよく發揮する。彼は缺かさず日曜には教會に往く。彼は全く無心に説教を聴き、信者と共に無邪氣に讚美歌を歌ふ。彼はよく教會に洋傘を忘れて歸る少年は之を持つて後から追ひかけて手渡しすると、宰相は心から有難い様子で受取る。

彼は往々にして無爲無能の評を受けて居る。カイゼルは彼の無能にして唯々諾々として命これ奉ずるを善い事にして、一個の人形として飾つて置くに過ぎぬと言はれて居る。併し之は淺薄者流の勝手な想像である。一度び伯林の宮廷に足を入れた人は、カイゼルが此の純一な宰相に對して、如何に親愛の情と尊敬の念とを有つて居るかを直ちに知る事が出来る。宰相の異常なる道德的性格は、カイゼルをして尊敬と愛慕との情を抱かしめて居る。宰相はその信

する所を枉げてカイゼルに阿るやうな人物ではない。彼は哲學者の冷靜と、道德家の意志と、宗教家の信仰とを以て、自己の職分を盡して居る。吾等がかゝる宰相を擧用するカイゼルも、決して凡庸の帝王ではないと思ふ。

先年獨逸國會に於て軍備擴張案が議せられた時に對し『歴史あつてより軍備を擴張せし爲に滅んだ國家は嘗て無い、軍備の負擔を厭ふに到つて國家は亡滅の期を免れなかつた、國を滅ぼすものは軍備に非ずして、軍備を厭ふ民心である』と説き各國の歴史を引照し來つて、殆ど歴史哲學の講義を聴くが如き堂々たる演説を試みた事があつた。吾等は此の哲學宰相の健在を祈らざるを得ぬ。